

# 東ドイツ教育の終焉〔I〕

—1989年 秋—

宮崎 俊明\*

(1990年10月15日受理)

Ende des DDR-Bildungswesens I – Herbst 1989 –

Toshiaki MIYAZAKI

## はじめに

「自由と人権という流行語がなりひびき、当局の権力を決定的な危機におとしいているのが現実なのか。……それともこれらすべては夢にすぎないのか。……政府の大きな決定的なあやまちとそれによって抑圧的で一般化した苦痛や不正が、この時代の人間を現状不信にしているのか。」<sup>1)</sup> これはペスタロッチのフランス革命論『是か否か』のまえがきのことばである。1793年、革命の4年後に書かれたが、当時は発表されなかった。ちょうどその200年後の1989年東欧の体制は崩壊した。

東独の場合、11月9日のベルリンの壁に象徴させ、「平和裡の革命」<sup>フリートリヘ</sup>「静かな革命」<sup>スタイレ</sup>(W. Brandt)「柔軟な革命」<sup>ザンフテ</sup>(M. Walser)「暴力なき革命」<sup>ゲハルトローゼ</sup>などといわれる (Billu. 1989/12; Sp. 13. Nov. 1989; Z. 20. Jan. 1990)。「革命の首都」はベルリンでなくライブチヒであり、その日は11月9日でなく9月4日から始まった毎週の「月曜デモ」がピークに達した10月9日だとする市民運動や教会関係者らの立場もある (M. Stolpe) (SpD. 1990/2)。支配した側には自殺者がでたが、支配されてきた側には「死者なき革命」の秋であった。10月5日、東ベルリンでの政治的中枢となったゲッセマネ教会で牧師B. アルバーニは、集まった人びとに次のように語っていた。「イデオロギーという新しい宗教の儀式<sup>リチュアル</sup>が自己を絶対化する。それは『ハイ』というリチュアル、選挙では(賛成の)白い票を投じるリチュアル、口出ししない沈黙のリチュアル、そして共に行進するリチュアルであった。……しかし、もうわれわれを国家という他者へと強いるリチュアルの奴隷制はない」(Räu. 20f)。この発言には牧師が宗教のことばを用いながらきわめて政治的なことを語っている。日常をとおして形成される意識内容や行動形態を教育の結果とみるならば、強権的な支配のもとにおく教育の体制化につねに同伴しているイデオロギー教化の強力さとその無効さもこの「説教」には語られている。

西独の場合、ナチズムの過去への執拗な追及と批判をやめず、加害にまわった側としてその歴史的罪責をもちかかえいまなお反省しつづける部分がある。それが80年代後半のいわゆる「歴史家論

\* 鹿児島大学教育学部教育学科

争」や教育学におけるナチズム研究の盛況をひきだしてきた。今やドイツ人は東独の教育体制をめぐってもうひとつの負い目をもつことになった。83年のヴァイツゼッカー演説はつとに有名だが、90年10月3日の統一の日のそれは、スタージ (Staatssicherheitsdienst, 国家保安局) のことにふれている。それが同一民族のなかで再び背負うことになる「過去を抹殺する歴史」(M. Mitscherlich) だからである。

東独の新人民議会は開会の冒頭、人民の名において自らのナチズムの過去をユダヤ人に謝罪した。その後、両独双方の女性議長がともにイスラエルを訪問したさい、東独側が「その罪を隠す者は栄えることがない。言い表わしてこれを離れる者は、あわれみをうける」(箴言28.13) と挨拶した。これに対し西独側はその席で、「あわれみやゆるしなどありえない。ユダヤ人には600万人のホロコーストだったのだから」とことばをかえした (Sp. 2. Juli 1990)。このエピソードは単に公式のレベルで事態は解決しない歴史的な反省や責任の問題として興味ぶかい。かつてはいわゆる68年世代の闘士であり今は教育学教授から政界に転身して国内で信望を集めるリタ・ジュースマス (R. Süßmuth) のこの発言は、東独の教育体制の実態とその反省や責任の問題としても興味をひく。その点では親、青少年、教師、さらには教育研究者が、規制され、教えられ、教え、指導してきた内容やその方式の事実を散逸させ隠蔽することがあってはならないであろう。「将来への清算」を基調にした90年3月の西独教育学会 (DGfE) 大会はナチズム問題をもっとも重要なテーマにしたが、もうひとつ東独側約100名を迎えたのもそのプログラムでめだっていた。そして3月24日には東独の教育学会 (DGfP) が誕生し、夏以降は東西の大学間で共同プロジェクトが生まれ、各地での研究グループ設立の動きも報じられている。

確実に今後は東独40年間の多くの教育事実が発掘され検討や反省に付されるだろうが、本稿では、1990年上半期までの報道、政府文書等で表面化している実態やその方向の整理と提示を試みる。閲読しえたその時期までの東西両独の7種の主要な教育学雑誌では、Bildung und Erziehungの1990年度第1号だけが両国の実証的比較分析を特集し5篇の論文を掲載しているが、それは89年初頭の企画の実行であって89年秋のいわゆる「転換」期の前後にはまったくふれていない。本稿では、とくに教育の対象となった側の日常と教育の方策を講じた側のイデオロギーとを対比し、転換のなかで起きた混迷、怒り、弁解、希望等々の様相を表面に出しておきたい。それが先にのべた歴史的反省と責任の問題にかかわると考えるからである。

なお、筆者は以前に東独側の研究者、研究機関、その社会に接したが、この稿のためには現地に入っていない。むしろ個人的な経験や印象をいわば対象化し客観化できる事態が89年秋の転換として表面化したと考えている。そのため以下では、ひとつには、末尾に一覧化したような報道記事に依拠し、わけてもその情報の収集の速さ、分量、水準で500万の読者をもつDer Spiegelへの依存を高くし、もうひとつには、政府機関や政党関係の資料を用いている。以下では転換期に直面した人びとの声を伝える課題を第I部本稿とし、改革方向を政策上で示す価値ある資料の紹介を第II部

別稿とする。

## I. 教育する党と国家

### 1. 指導的イデオロギー — 第9回教育会議 —

1990年10月7日はドイツ民主共和国(DDR)建国40周年の記念日であった。その日、国家評議会議長にしてドイツ社会主義統一党(Sozialistische Einheitspartei Deutschlands, SED)の党首Erich Honeckerは、「党と大衆との統一がいまほど大きかったことはない」といいはなつた。しかしその10日後には18年間にわたつたその地位からおりていた。そのあとには東独の青少年教育の典型自由ドイツ青年団(Freie Deutsche Jugend, FDJ)の幹部からのほりつめたEgon Krenzが就いた。彼は、デモのプラカードで「エゴノミー(エコノミー)ではなくてエコロジーを」とファーストネームをもじられ、「グレンツマン」(最後の境界線上の男)と揶揄されながら、この「人民なき支配者」も40日で去つた(Billu. 1989/12, 115; Sp. 23. Okt. 1989)。12月3日である。この日の中央政治局(ZK)の解体とともに東独の「鉄の夫人」ホーネッカー夫人Margot Honeckerも実に26年間に及んだ教育支配の座をすて人民教育省の「裏門から出ていった。」その6ヶ月前の6月15日、彼女は第9回教育会議で最後の人民教育相として「わが社会主義教育体制—その変遷と成果と新地平—」と題する演説をしている。省内にあるドイツ民主共和国教育学アカデミー(Akademie der Pädagogischen Wissenschaften der DDR, APW)の発行する『教育学』(Pädagogik)は、彼女の60ページに及ぶ演説を掲載するために7・8月合併号となり、最新のSED教育体制の指針として教師や研究者に提示された。

「マルクス・レーニン主義政党的指導下でわが人民とその青少年は、歴史の歯車を正しい方向に強力に動かしてきた」(Päd. DDR 1990/7・8, 548)。「この強力な社会主義こそ…… 平和への確実な保障である」(ebd.)。社会主義は「労働者階級が作ったものであり、国民戦線で統一している民主的にして反ファシズムの力であつて、それはつねに勝利してきた」(ebd.)。「現存の社会主義社会こそ近代的、人間的、民主的な社会であつて、 Kommunismusを包圍し、社会主義を抑える敵対者に成功はないであろう」(ebd. 553)。このように人民教育相は、ひとびとが「社会主義の祖国の家長として方向づけるよう助言する」(ebd. 548)。

「わが共和国における40年間の学校の発展は、学校制度の連続的で大いなるダイナミズムの刻印をもつ質の組みかえとそのたえざる完成化との過程であり、40年間にわたる社会主義の教師の世代がもつ新しさである」(ebd. 549)。「たしかに、教育は経済と政治とイデオロギー闘争の複雑かつきびしい条件のもとにあつて、容易ならざるものとなつてきた。それゆえにこそこの世界とのとりくみを青少年に要求せねばならぬし、そうしたいと思う」(ebd. 561)。いま求められているのは、「確固たる政治的知識が促す自立的思考と正しい階級的立場」(ebd. 565)であり、そのためには「良き学校風土、日常の秩序、正当かつ友好的な相互交流の尊重」(ebd. 567)が求められる。教育

課題としては、「一般教育の強化、社会的要求への対応、科学・技術への即応、責任と独創性への教育、訓練、信頼、義務意識および先駆性」があげられる(ebd. 559)。教師にあつては、初等・中等教育の場合は、マルクス・レーニン主義理論、教科の専門知識、教育学と心理学、教育実習が必要であり、その教育労働は、「FDJと学校との共同作業」に見出される(ebd. 599)。高等教育の教師には理論知識とともに「イデオロギー的、政治的かつ道徳的特性」が要求される(ebd. 592)。

この基本方針に呼応して、会議では科学アカデミー総裁で党中央委員のW. Schelerも個人と集団、専門教育と道徳教育、先駆性と集団性、科学と経済、これらすべてが止揚される展望を説いた(ebd. 613~619)。もうひとり、19年間教育学アカデミーの会長の地位にあるG. Neunerは教育の理論と実践の変化を1960年代の「人格理論」、70年代の「個性の最適発達」、80年代の「創造性」と定式化した。ここ数年の教育水準につき、アビツアにはふれないが、初等教育での語い力の10~20%の向上を述べた。また、今世紀初頭のいわゆる「改革教育」に注目する一方で、今日の社会主義諸国の教育学にある「行政的命<sup>コマンドベグゴギーク</sup>令教育学」の現実を認め、それを個人と集団の弁証法的媒介で克服するために「新教育のルネサンス」を語った(ebd. 619)。ことに理論家として著名な彼は、「科学と党派性の統一」をめざし、その条件としてあらゆる教育行為の中核に人格発達に重要なイデオロギーの教育をすえる。知識と能力の獲得としての陶冶と、態度と行為の形成としての訓育、このふたつの統一をめざすとき、イデオロギー的意識形成は不可欠であり、日常基盤と「科学的イデオロギー」との対立は、後者の優位により統一される。これが党を「科学的に」正当化する根拠を与えるだけでなく、教育が党に寄与し、学校と青少年組織に現体制下の指導理念として集団主義的イデオロギーを確立する必要があることを再確認した(ebd. 610~612; Hbddd. 107, 162)。

## 2. 問題点の噴出 —ある住民集会—

11月14日の夕、開放の5日後、15世紀以来の有名な大学町であり、バルト海に面した人口5万余の町グライフスバルトの地区集会所でひとつの会合がもたれた。テーマは「学校での陶冶と訓育」、150人の住民と市当局からはSEDの記章をつけた学校評議員(Schulrat)および総務委員(Stadtrat)が出席、若い教区牧師が司会して会は2時間に及んだ。それをDGfEの学校教育・教授学部門委員長で西独のジャーナル『教育』の編集者K-J. Tillmannが「11月革命—具体的に—」と題して構成しているが、圧縮して示せば次のようなやりとりがあった。

(司会)「いまの学校問題を説明して下さい。」(学校評議員)「激変です。今日までは中央集権的で、住民の権利要求には応えていませんでした。」そして教科など10項目の変更を伝えたあと、(住民)「学校の指導簿には父親の職業階層とSEDの党员かどうか記入され、それがみんなにわかるようになっていきますね。」(学校評議員)「そのとおりです。今後ただちにとり止めます。」(住民)「こういう記録がどこへまわされるのかが問題です。」(学校評議員)「わたしは承知していません。」

(参加者のなかのある牧師)「あの旗ふりの行進や学校での兵員募集はいつから止めますか。」(学校評議員)「ばかげたことでした」(参会者笑い)。(大学教師)「アビツアへの不満が高いです。進

学や進路を決定するアビツアの点数が住民を抑える手段と化し、親の会の選挙ではキリスト教信者ははずされ、その秘密主義で学校側の干渉や介入があります。」(学校評議員)「いわれる事実があります。旗ふりの行進は、今後は特別な行事を除いて平常化しないよう学校側に指示いたしました。親の会への信者の方の参加は尊重します。」(住民)「いつから実施しますか。ここ10年間なんら手をつけていないではありませんか。」(学校評議員)「従来のいきがかり上無理でした。わたしとしては信念でおこなってきたことが、いまやあやまりとなりました。今後この任から退きます。」

(住民)「FDJぬきの生徒会はいつからできますか。」(現職教師)「これまでFDJに入会していないことを理由に進学が認められなかった多くの生徒のことがわたしには忘れられません。」(別の女教師)「教師の自己決定権や教員組合の民主化が求められています。教師や生徒のなかには復職や名誉回復の必要な者がいます。」(総務委員(はじめて発言))「わたしを信じて下さい。学校評議員も申しましたが、人民教育は国家の手中にありました。国家と党のこの癒着にあったあやまりはもう忘れたいものです」(騒然、笑い)。

(中年の女性)「学校に不満をいえば、『国家の敵』とされ、子どもが成年式(Jugendweihe)に出なかったのを理由に学校遠足への参加を禁止されたことがあります。」(母親)「少年ピオニールに入っていないわたしの6歳の子どもは、クラスみんなの前でその理由をいわされました。しかもこのことを家に帰って親にいつかはいけないと担任の女の先生はいつているのです。」(若い母親)「幼稚園でも大同小異です。子どもは5月1日(メーデー)と10月7日(建国記念日)は知っています。でも、クリスマスのは知りません。」(牧師夫人)「ピオニールの時間をつかってクラス全体のことが伝達されるため、入っていないわたしの子どもにはなにもわからないことがあります。」(若い独身の女性)「学校での宗教教育はいらないとおもいます。でも聖書は必要です。」(学校評議員)「目下検討中です。文化史の授業でとりあげます。成年式は任意参加にしたいと考えています。」

(住民)「校長はこれまでもSEDの職業的幹部だったのですか。」(総務委員)「そのとおりです。SEDの地区代表が入っている市議会の承認が必要ですからそうなっていました。」(住民)「わたしは学校評議員だけに責任をおわせられないとおもいます。中間幹部もいるのですから」(拍手)。(会場からのさげび)「要は学校とSEDの分離だ。」

(総務委員)「SEDのような『真実』の独占はその5分前でも、いやその5分後でも止めることです。人間の顔をした社会主義の実現にはこのわれわれふたりの力には限界があります。首脳部に伝えておきます。」(司会)「民衆の教育を作り出すために作業グループをつくりたいとおもいます。これまでのように『社会主義は処分されない』というのでなく、『民衆の意思こそ処分されない』といいかえたいとおもいます。これで閉会します。気をつけてお帰り下さい」(Päd. BRD. 1990/3, 14~18)。

このフォーラムのやりとりのなかで市当局のふたりは対照的である。教師上がりにみえる60歳近い学校評議員は、市の行政機構のなかではきわめて弱い部門の教育を担い、職務を忠実にはたしてきた。そしていまはじめて直面した住民の追及の前で辞意すら表明している。逆に40代半ばで学

位までもつ総務委員は言を左右して責任回避をし美辞麗句をあやつっている。一方、出席者たちは学校という閉鎖的な壁のむこうに閉じこめられている自分の子どもたちをとおしてえた事実を次々ともちだし、現職教師も内部の問題点を表に出している。彼らの発言は断片的だがきわめて重い事実の集積である。

### 3. 監視下の市民生活と学校 — スタージー —

上の集会は、社会が強力な統制や監視のもとにおかれ、政治的軍事的な一定の方向づけを強力な権力機構ではかるときにおこる学校教育の日常的な様相を示している。このような圧迫された側の事例は、89年の10、11月にせきを切ったように表面化し、多くの証言がもちこまれた。たとえば、建国40周年にさいしてニューフォーラム系の市民運動グループが『証言—その40年』として出した記録を西独の報道は次のように伝えている。戦争で夫を失い、月340マルクでハッレでひとり暮らしをする84歳の老女は、電話を盗聴されたその息子が国家侮辱罪として半年間収監され、医師だったもうひとりの息子は大学での講義停止処分をうけたことを語る。また、父と妹が西独にあり、自分は東ベルリンで母親と暮らしながら自由劇場の同人になっているある25歳の女性は、ドイツ民主共和国なるものがひとに目も耳もきかせぬ「心理的拷問の方式」を用いていると訴える (Sp. 9. Okt. 1990)。

その点で「転換」後に東独がもっともおそれ、逆に東西の市民運動、西の政府当局、マスコミが最大の問題のひとつとし、ヴァイツェッカー大統領も統一の日の演説でいわば「精神のナチズム」のごとくふれているのがスタージーの問題である。その正式名が示すように、監視が国家の安全の名で単に権力、軍事、行政、技術といったものにかぎらず市民生活の全体をおおっていた。本部は3千の部屋をもち8万人の要員と11万人の非公式の協力員をもっており、その第20部局が人民教育、青年、文化政策、スポーツの分野でその役割を担っていた。90年3月31日の閉鎖段階でその部局長はインタビューで、「命令をうけ証拠を出す仕事をしたまでだ」といっている (Sp. 29. Jan. 1990)。同様にモドロウ内閣の内相も西側記者に「あなたもスタージーだったといわれているが…」と問われ、「イエスにしてノーだ」と答えている (Sp. 23. April 1990)。R. Eppelmann は元牧師にしてデメジュール内閣の国防相だが、彼は『シュピーゲル』の記者との会見で、人民議会にスタージー関係の議員が17人から40人はいるということを否定していない (SpS. 1990/2, 56)。

かかる問題について学校の日常では、体制批判者はもちろん政治的な教師、平和運動、とくに人権運動への関心者、キリスト教に積極的な教師、加えて地区牧師などが追跡や追及の対象となっていた。学校にいる党員事務長は校長と同格に近く、校長、公民科教師、FDJ指導者のほとんどがスタージーとコンタクトをもっていた。生徒や熱心な党員教師の子どもも密告者になりえた。ある日ひとりの女生徒が突然校長室によばれ、そこにいたふたりの男性にこう詰問される。「きみの背後にいる人物はだれだ。友人にはだれがいるか。でも言わなくていい、みんなつかんでいるから。」実はこれは彼女がFDJの集会で、義務としての「万歳」を他の4人の生徒とともに唱えていなか

ったことに発していた (Sp. 12. Feb. 1990)。

## II. 制度としての初等・中等教育の表面と深層

### 1. 幼児教育—権威・秩序・衛生

「<sup>オンケル・エーリッヒ</sup>エーリッヒおじさん」これはDDRの幼児たちがもっともよく知っているホーネッカーをよぶよび方である。彼が幼児から花束をうけ、その子にはほおずりをしている写真や映像は、学校の壁面にかかげられたその肖像とともに知らぬ者はない。誕生祝いの好きな幼児たちは8月25日が「この国でもっとも優しくえらいひと」の誕生日だとおぼえている。しかし、「ママ、ねえ言って、エーリッヒおじさんって悪いひと〔犯罪者〕？」という問いに母親は困惑し、「母親の代理」である保母も自分の人格的二重性を子どもにさらすことになった。幼児たちは、受容していた人格価値の転落で心傷<sup>トラウマ</sup>をうける。このとき、ヒトラーやルーマニアのチャウセスクの場合もそうだったが、国家ないし支配の権威性とその頂点にある人物の権威を重ね合わせて、子ども達にはまず「優しさ」として受容させていこうとする普遍的ともいえる方法がその第一段階で途絶する。東独の幼児教育特集をした『シュピーゲル』は、「エーリッヒおじさんのドラマは集団のドラマだ」(A. Barth)というが、それにはさらに「集団のトラウマだ」とつけ加える必要がある。保育所や幼稚園の子どもたちには、いっさいのいいこと、価値の典型として「エーリッヒおじさん」が選ばれて保育の内容や教材に入り、街頭や家庭で氾濫する政治的メディアのひとつとして与えられていた。それによって政治的ファンタジーへ誘われていた子どもたちは、いまそれがイリュージョンになってしまったところにいる (Sp. 26. Feb. 1990)。

東独では、10ヶ月児から2歳児までの81%が全日、季節、週間などの保育所 (Kinderkrippen) に、3歳児から6歳児の就学前児の94%が幼稚園や子どもの家 (Kinderheim) に入るほど幼児教育は普及している。保母は4歳児にホーネッカーを、5歳児には彼らがやがて入団するピオニールの別名 Ernst Thälmann をあつかい、ふたりが労働者の生活を改善し、戦争やファシズムに勇気をもって戦ったすぐれたコミュニストであったと教えねばならない。いわゆる「青本」とよばれた保育要領が4歳児に20分、5歳児に45分の指定をする「社会生活を教える」というイデオロギー教育の核心がそれである。保母はこの『幼稚園における政治-教育労働要領』を暗記しておく必要があった。幼児をしてこの「社会主義の強国への愛」をさとらせ、その軍事と防衛の意味に目覚めさせねばならないからである。その根底には、「世界にはいつもわたし達の平和な生活を脅かす敵がいます」という、いわゆる敵対表象があり、その敵の像に対する蔑視と戦闘の意識形成がされる。一方で社会主義諸国との善隣友好の関係確立がいわれながら、他方でこのように子どもにとっては非現実的な不安を喚起する表象が強調される。そのうえ「抵抗の戦士」「敵」「搾取者」「弾圧者」「ファシスト」のごとき難解なことばが形どおりに使われていた。「ドイツ民主共和国には西のドイツのように搾取者やファシストはいません。」このようなことを子どもたちはABCを覚えるより前に

聞かされていた (ebd.)。

3月1日の国家人民軍の日には幼稚園児は兵營を訪問して、「兵隊さん、こんにちわ」の歌をうたい、帰りのときには「ぼくは大きくなったら兵隊さんになる」を歌って別れる。「平和と進歩のためにひとびとの連帯」が鼓吹され、人民軍、国境警備隊、警官は幼児には強さと偉大さの典型であり、ことに男児にはひとつのあこがれとなる。とうぜん、子どもの日常の遊びでも、ことばやしぐさなどに軍事色が入る。おもちゃでも戦車や武器が愛好され、絵本や物語りにも浸透する。ここにはすでに幼児期にみられる「イデオロギー的軍備拡張」とその日常化した文化の風景があり、「DDRの子ども史の暗黒の一章となっている」(ebd.)。

「保育所そのものがすでに社会主義への寄与だ。」保健省でマルゴット・ホーネッカーと似た立場にあったB. Kuchlerのこの発言には、保育所を教育と社会福祉だけではとらえきれないものがふくまれている。統制計画経済と家計との両面から職業従事に迫られていながら、公式には就労女性、とりわけその母親は女性の模範であった。家庭での育児専念は育児手当の減額ないし打ち切りを招き家計を圧迫する。このため10ヶ月児から2歳児の5分の4、3歳児の95%が無料同然の経費で保育所に託されていた。朝7時から夕19時までのその保育時間は母親の職業活動を助けたが、子どもには全日に近かった。この「充実」はドイツ民主共和国の誇りであり、同時に西に対する優位の証左とされた。西独では子もち女性の職業従事が東独の3分の1にすぎず、なかでも3歳児以下の場合には10%しか保育所に入所できない事実保守的個人主義の家族イデオロギーをいい、現今、西独の現実が子ども虐待、放任に由因する適応困難を生んでいると問題視している。西の子どもがいれば「快樂原則」にたち、「小さな快樂主義者」であるのに比し、東の子どもが身につけているのは「ひかえめ」の美德である。しかし、もし東独が新しく、西独が古い保育形式であるならば、この東の子どもの態度様式がその全体社会の権威主義的な抑圧構造に関連しているのが看過されているか、あるいは隠蔽されている (Sp. 26. Feb. 1990)。

19ヶ月で「きれいに食事をとり静かに座っておれる」という保育課題が、徹底されみごとに達成されていた。ここには衛生基準が先行し、「清潔と秩序」が支配的価値となり、「みんなと同じ」が学習モットーになった。同時に、国家がめんどうをみることで子どもにはムティ(ママ)に代って「母親の代理」が登場する。統一後の保母ひとりあたりの担当子ども数を14名以下と西側が提唱するように、保母は多人数ゆえに保護よりも「固定化と規制」に傾いた。一方で母親は子どもをあずけざるをえず、他方で彼女らに「あずけのメンタリティ」という悪しき託児心理を生みかねない。子どもは保母の叱責を避けようとして行動の抑制をうみ、あるいは服従的になった。子どもの「ひかえめ」や不満耐性の過度の強さは、母親に対したときその反動としてあまえ願望で補償しようとした。

施設保育か家庭育児かの議論は、イデオロギー・レベルの対立に導くだけでなく、子どもの言語能力、知的能力、情緒などの発達に関して西側の心理学的研究や、行動・態度のスタイルについて



の文化人類学的調査の知見との対立にも導く。加えて保健上の問題としても、東独の統計一般は現状では把握しにくいだが、ザクセンの中都市ゲルリッツの衛生部の医師が3万人を対象にした調査では、保育所の子どもは家庭にいる子どもに比し4倍の通院率を示した。このことはハンガリーにおける同じ調査の数値にてらしても首肯できる (Sp. 26. März 1990)。このように社会主義的保育の実態が「国家の配慮の影の部分」をもうひとつ写し出しているのも否めない。

ある母親がいうように、「社会主義が子どもといるいちばんよい年月を私から奪った」のも現実であった。東独でも西独で流行語となっているDinks (double income, no kids), 収入2倍で子どもなしに近い、第二子を望まぬ傾向がみえながら、その構造要因は明暗のコントラストを示している。施設幼児教育が、「みんなと同じ」の目標をかかげ、衛生と秩序を前面に出して権威と統制のつよい集団化に傾くとき、子どもたちはその社会体制がもちこむ保母という「小さな政治指導者 (Politruk) への教育」につなぎとめられていた (Sp. 26. Feb. 1990)。

## 2. 初等・中等教育

10年制義務教育のポリテクニズム初等・中等学校 (Politechnische Oberschule, POS) は、1～3学年の初級、4～6学年の中級、7～10学年の上級に三分され、教科は初級ではドイツ語と算数を中心に、社会、自然、工作などが教えられた。「移行段階」の第4学年をへて、5学年では歴史、地理、生物、ロシア語が必須として登場、この学年ではじめて大学卒業資格をもつ教師が担当する。7学年からはPOSの最重要教科「社会主義生産入門」(ESP)が開始され、関連して工場・農場実習がおこなわれた。この段階の選択科目には、英語を中心にフランス語、スペイン語、ポーランド語、チェコ語などの第二外国語がある。とくに最終段階の9～10学年には、必須科目として防衛科 (Wehrkunde) が登場、選択科目としては「マルクス・レーニン主義哲学」から「飼料作り」にまたがるコースが開設されていた。なお、このPOSには、児童生徒の約10%のための特別学級ないし特別学校が第3学年から制度化され、領域としてはスポーツ、音楽、ロシア語、その後では数・理・技術、近代語、古典語の英才教育への道が敷設されていた (Päd. BRD. 1990/3, 18～23)。

一般に社会体制の統制的画一的傾向と教科書および集団組織の重視とは表裏一体、車の両輪のごとく機能する。教科書には体制の傾向を正当化する内容がもりこまれ、組織のなかでそれを青少年に受容させ強化する訓練の形態が入って顕在潜在両面での政治的カリキュラムが作り上げられる。その政治教育は社会的事項の概念事項を伝達する前に、情緒的に意識形成をはかり、日常行動や儀礼・儀式レベルでも進められて威力を発揮し、学校内外の諸行事で推進され結実する。しかしそれは歪んだ実であることが多く、東独の場合もそのひとつの典型であった。

たとえば、第3学年用郷土科 (Heimatkunde) の教科書には次のような記述がある。「ドイツの反ファシズムの人たちは、ファシズムの支配に命をかけて戦ってきました。それを指導したのが共産主義者でした。」「ドイツの西側では、資本家が自分たちの国としてドイツ連邦共和国をつくり、彼らはドイツ民主共和国を侵略しようとしてきましたし、いまでもそうしようとしています。」「わた

「私たちの祖国の敵たち」は、「扇動と犯罪と略奪」でこの国を亡ぼそうとしている。1955年におきた3千頭にのぼる牛の死亡事故は、西独の会社からの輸入品にあった毒物のためだったとされている (Sp. 12. Feb. 1990)。

児童は新年を迎えるころ、郷土科の教科書で「労働者階級の闘士の誓い」を習った。そこにはこう書かれている。「わたしは、党の指示をやりぬくため、いつでもドイツ民主共和国とその仕事のため手に武器をとりいのちをかける用意をしています。」この「いつでも用意をしている」(immer bereit)こそ、のちにクラス担任が「平和と社会主義のためにそなよ」というと、子どもたちが額に手をあて「用意よし」という形で応じる、この国の政治体制がもちこんだ教育のセレモニーにはほかならなかった。それは、授業にとどまらず、労働や戦争の場面に通底する奉仕的、権威服従的な姿勢を強化する役割りを演じていた (ibd.)。

かかる軍事的色彩は、POSという10年間の義務制「統一学校」に一貫している。第9学年の防衛科では14日間の演習、最後の第10学年ではガスマスクの装着、手りゅう弾のにぎり方と投げ方を習得した。女生徒もその演習では「出陣規則」に沿うかたちで、「同志、報告します。ただいま第一小隊は危険状況に突入しました」と直立不動の姿勢で女教師に叫ぶ。教育のもとに、少年は自分の身の丈より大きい銃を直接手にし、高学年では射撃訓練があり、射的試合が学校行事のなかにもりこまれていた。ことに西独との国境に近い学校ではこの防衛科教育がもっとも重視された科目であった (ibd.)。

公民科 (Staatsbürgerkunde) についても、その教師用指導書の基準には次のような指示がある。「ドイツ民主共和国にあっては、国家のすべての政策は全人民の福祉とそのより良き生活に役立っている。ドイツ連邦共和国では、国民はときに巧妙な、ときに粗暴な支配方式で抑圧されている」(7学年用)。「工業と農業の全面的かつ確実な成長こそ資本主義に対する社会主義のなにより本質的にすぐれている点である」(8学年用)。「資本主義の国家装置は、労働者に対する抑圧手段であり、わが国と他の諸国の人民の経済的収奪を確実にする道具である」(9学年用)。「いまや、資本主義に対する社会主義的社会秩序の優勢がおこりつつある」(10学年用)。

上のような記述が客観的事実に即しているかどうかは、それを書いた教育学アカデミーの関係者らには二次的である。もし、そのことが問われるなら教育の課題として理念や規範にあずけた回答がされるであろう。むしろ生徒たちに彼らが直面する窮状から目をそらさせるか、あるいはその現状を肯定的に受容させるかの機能、すなわちイデオロギー機能を発揮することが期待されている。また、上の指導書の記述にみられる西独についての濃厚な敵対像は、教師が生徒たちに自国の優越的立場を内面化させ、西独を攻撃や分断の対象として意識させることを指し示している。しかし、これらが危険でもあり、生徒に不安をうえつけ、恐怖感情をひきおこす点はまったく無視されている。ある少女は、学校から帰って家人に、西独では貧しい人は木の家に住んでいるのだ、と告げ、ある青年は子どものころ、西独の労働者は病気になると殺されてしまうと思っていた、という (ibd.)。

このように異質なものを作りあげられた敵対表象の事実には青少年を接近させぬ方策もまた同様に教育的な措置として彼らをとりまいていた。たとえば、児童生徒には年に3回ぬきうちの「かばん検査」(Ranzenkontrollen)があり、教師はもしそこに西独やアメリカの物品、人気コミックスのアステリックスやドナルド・ダックをみつけると、指導日誌に記入し、校長に報告する義務があった。また、ある17歳の生徒は東ベルリンの市立図書館で西独の基本法を調べようとしてその本を請求したとき、彼の年齢では閲覧禁止図書になっていると告げられた(ebd.)。

「社会主義生産入門」の第9学年用教科書には、社会主義的労働は「共同労働」であり、「党と国家の指導のもとで広範かつ自覚的に活動し参加する点ですぐれている」と書かれている。この体制での生産過程の合理化は、国家収入を高め、それによって全人民の生活改善を導くためにある。それはアメリカや西独のごとく資本家のためにあり、労働の強化や災害を招いているのとは本質的に異なる。したがって、「党が……事業場で指導的役割を演じ、労働組合とF D Jとがそれを助ける。」このような枠組のなかで労働には競争的性格をもたせ、たとえば「社会主義的労働集団」賞が設けられ、その1968年度のコンテストには200万人が参加、うち12万人が入賞した。「あなたの事業場で社会主義的労働集団がもつ長所をあげよ。」これは労働実習にも使うその教科書の最終章にのっている課題問題のひとつである。<sup>2)</sup>

10学年終了後のいわば後期中等教育では、アビツァ取得を目的とする在学2年制の拡大初等・中等学校(E O S)と、同じく2年制の職業学校、さらに3年制のアビツァつき職業学校の三種類があり、その進学比率はそれぞれ同年齢層の約8, 70, 4%である。そのほかにすでにその前の8学年終了時に7%が3年制の職業学校に、10%は3学年のときから12年間にわたる段階で特別教育の道へと抜擢され分散していた。たとえば、E O Sでは週35校時のうち選択必須が5、選択が3校時のごとく、西独などに比し必須時間数が多く、在学年数は1年短い。最終段階のアビツァは筆記と口述により大学入学資格をえる形態をとっているが、人民教育省がその成績と資格の判定を「政治-道徳的かつ性格的成熟」と「社会活動」としているのがきわめて特異である。また、職業学校では一般教育と職業教育を志向しながら前者が少なく、大半の生徒は約300の分野に分散する事業場内教育をうけ、1年半の基礎と半年の専門の教育をうけた。この職業教育は、事業場の内部ないしは外部での研修的補充的な再教育の役割も担っていた。付言すれば、学校教育ではないが人民大学(Volkshochschule)を各地区の行政が組織しており、それは文化-芸術、教育、世界観の補強といった課題をもっていた(Päd. BRD. 1990/3, 18f)。

言語はそのいわゆる象徴暴力性においてことに政治、軍事、労働、宗教などにかかわるイデオロギーの注入や教化という教育作用をする。これはナチズム期にひとつの頂点をみせたし、漢字練習とて例外ではない。東独の子どもたちもたとえば3学年の郷土科で正書法をかね、「よく考え正しく書こう」という形式をとった次のようなことばを練習した。「わたしの友だちのソビエトの兵隊

さん」「旗あげ」「同志テールマン」「ピオニールの生まれた日」「レーニンのひかえめさ」これは算数とて無縁ではなく、その文章題では、西独の子どもには長期ヴァカンスの列車が事例となるのと対照的に、次のような問題がみられる。「4台の戦車が演習場へむかいました。1台に3人の兵隊さんがのっているなら、みんなでなんにんが行きましたか」(2学年用)。「国家人民軍の兵士の場合、重装キャタピラ車は1時間につき15キロメートル進む。この速さで19.5キロを進むとき、かかる時間はいくらか」(5学年用)。

「愛」も、東独の教育が政治、経済、軍事を包みこむ標語である。それは「幼稚園への愛」「郷土への愛」「働く人たちへの愛」「社会主義の祖国への愛」「労働への愛」のごとく、幼児から青年に至る教育の段階的指標ともなっていた。この愛は、ブルジョア体制の産物とされる神、異性、知識などへの愛を排除ないし軽視し、かわって「社会主義的徳」の中核に位置づけられる。かかる愛と徳の思想こそが、西側が問題視する表現をかれば、集団こそ個性を展開する環境とし、集団にすべてを解消させてしまう教育学アカデミーのなかの「SEDの導師」の教説であった。そこには命令一服従の行動機制があり、自由と自立よりも従順の美德へと青少年は導かれる。その点では民主的とは対極の権威服従的なパーソナリティが育成され、判断様式が賛成か反対かに分極化し、ことに方向を指示し指導する者との「合致」にむかう行動パターンを生み出す。その典型を示したのが学校外青少年組織である(Sp. 12. Feb. 1990)。

### 3. 青少年組織

統制的教育のなかでの体制的人格の形成には、教科以上に組織集団が威力を発揮した。1年生のほとんどが「少年ピオニール」に加入、4年生では「テールマン・ピオニール」に入り、そのあとにFDJが続いていた。また、1～4年生の80%余りの児童が参加していた学童保育所(Schulhort)も重要な社会的、政治的機能を発揮した。ピオニールは学校の諸行事でも影響力をみせ、児童の成績評価をも支配した。授業のはじまりどきに児童が起立して右手をあげ「友情」ととなえるセレモニーは、実は、ピオニールが教室にもちこんだものである。特別学校や特別学級に在籍する優秀な児童・生徒で組織された団体もあり、そのデモンストレーションはMMM(Messe der Meister von Morgen)、「あすの名人の見本市ないしショウ」として競争的性格をとくに濃厚にしていた。同様にFDJでも「優良知識章」なるバッジを出していた。また、14歳の成年式は、教会による青少年少女への聖体拝受や堅信礼という伝統的な宗教的通過儀礼を無力化するとともにそれを政治的なものに転換して機能させた。それは「社会主義的成年への門出」の式として教育体制に完全にくみこまれ、教会でなく地区集会所で、牧師によってではなく青少年指導員や学校教師によって、信仰による救済にではなく社会主義の偉大さにむけてその義務を宣誓した。

これらは原則として任意参加であったものの、不参加や不熱心は進級、進学、就職に影響した。このような青少年の学校外日常の組織化は、集団所属感と競争意識を高め鍛練色を強めていく。青少年の行動は、その内発的動機によってよりも、集団に設定された目標と規律にリードされ、その

ことが学校での学習と同様、彼らに過度なドリルとディシプリンを受容させた。集団とその外部から強いられて作られた擬似的アイデンティティが「適応」とみなされ、逆に心理的な緊張と不安の結果脱落した青少年は不適応のラベルをはられることになる。一般に、全体集団のためにドリルとディシプリンが正当化される事実は、イデオロギー上は左右両方からわれ、歴史的には前近代的な形態であり、発達心理的には少年期的現象であろう。教育学アカデミーが、1989年、「今やすべての生徒は教科外活動でも完全に編成された」といったとき、少なくとも集団化のもつ得失の両面はみえていなかったといえよう(ebd.)。

### Ⅲ. 高等教育と研究機関の実態

#### 1. 大学

大学53校、教員7千人、学生13万人の東独の大学は、「社会主義的インテリゲンチアの城」として体制エリートの供給を目的とし、大学・専門学校省を中心にSED支配下の科学アカデミー、わけでも社会科学アカデミー、内務省、国防省、自由ドイツ労組(FDGB)、FDJ全国連合、これらとの緊密な関係で運営されていた。初等・中等教育の場合と同様、大学省の編んだ『新学習年鑑』(1989/90)がいうように、「社会主義的民主主義のさらなる完全化」をめざし、学生は「帝国主義のあらゆる現象形態と戦い」「ことにドイツ連邦共和国の帝国主義とその敵対的新ファシズム傾向と戦わねばならない」(Hbdd. 700ff)。

しかし、専門領域の論文や出版物をさがし読むものには、いわれている活動の旺盛さや水準の高さなどは確認しがたい。むしろ大学はここ40年間の静かな秩序とひきかえに沈滞をその体質にしていた。学生は「中庸と心地よさへの首かせ」をつけられ、政治的にも文化的にも、たとえばプラハなどとは対照的に前衛は皆無だった。1953年6月17日、ソ連軍戦車の前で多くの同胞に犠牲者を出し、西ベルリンがブランデンブルグ門西方を「6月17日通り」と改称したのとは無縁に学生は沈黙しつづけた。1968年、壁ひとつむこうの自由ベルリン大学が欧米諸大学と同様に揺れていたとき、東はそのR. デュチュケやR. パーロを追放し西のヒーローとしたが、多くの学生は無関心、無知であった。80年代の平和運動の波にも自由な学生として「人間の鎖」に連なるものはなかった。むしろそうできなかった。それゆえ、この「10月革命」のときも例外ではなく、いま彼らは「自分を破綻した大学組織の最後の犠牲者と感じはじめている」(Sp. 19. Feb. 1990)。

たしかに学生の食住は保障されていた。全学生の70%が月10マルクの寮生、1マルクの学食、西と比べれば4分の1だが80%が月200マルクの奨学金をうけ、成績優秀者には特別奨学金があった。しかし、その代価が適応であり、徹底した監視体制はピラをうつしていた神学の女子学生を奨学金給与期間の短縮という形で処分したりしている。スポーツとロシア語が大学によっては必須科目である場合があったが、履修の中心科目は学生用語でいうML(「マルクス・レーニン主義」)研究とそこでのDiamat(「弁証法的唯物論」)の研鑽である。この科目は、2年間で285時間、週あたり

4時間の必須として大学カリキュラムに君臨していた(ebd.)。西側からは軍部になぞらえて初等・中等教育が「命令教育」(Kommandopädagogik)といわれ、経済体制すらそうよばれているなかで、大学教育とて例外でありえず、SEDが頻用した軍隊用語がいわば「思考の軍事化」を促した。「社会主義的闘争(Wettbewerb)の戦闘目標(Kampfziel)」「進歩の最前線(Front)」「工業生産の興隆への戦い(Schlachten)」「平和の闘士(Friedenkämpfer)」「新たなる敵の像(Feindbildern)」このように「社会主義的知識人」にみられるイデオロギーを定型化した権威主義的語法には、その「戦争ボキャブラリー」がちりばめられている(Tsp. 13. Feb. 1990)。これは、Ch. Wolfのよく知られたよびかけ、「あらゆる革命運動はことばを自由にするものです」とは明らかに対極にあるものだった(Wir. 213)。

「労働者と農民の国家」の大学は、いうまでもなく、最下層の「労働者—農民階層」が中心になるべきであり、プロレタリアートによる「科学の牙城に旋風を！」を標語にしている。ABF(Arbeiter-Bauern-Fakultät)、つまり「労働者と農民の学部」がその模範でなければならない。公式には現在全学生の55%がその第三階層の出身とされている。しかし、東独の統計は、非公開性が高いことに加えて89年春の東ベルリンの地区選挙の手なおし問題のように操作性も高く、西側ではつとに問題にされてきた。たとえば極端な例ではホーネッカーの審問調書の職業欄には「とび職」とあり、第三階層に入る。また、もし子どもの父親が農業、母親が教職にあれば、同様に第三階層に入って、進学などには有利に働いた。学生の出身階層の実態は、フンボルト大学の社会学の部門長A. Meierの分析では、発表は禁じられたが、今日60~80%を第一、第二階層が占めるとみられている。「労働者と農民の大学」の体面を保っているのは、今や僅少差で唯一フライベルク鉱山大学だけである(Sp. 19. Feb. 1990; SpS. 1990/2)。

専攻に対する学生の人気・集中度では医、薬、情報、心理、生物などが高位群に属し、逆に農業は低く、教育系は最低にある。大学の学籍や専攻の途中変更の道はほとんどなく、そのために通常1年半の徴兵義務期間を3年に延長して有利な処置がえられる方向を選ぶ青年も生んでいた。こうしたなかでアピツアの入手と大学入学にさいして「人格全体の重視」という公的な尺度で特権的に入学してきたFDJリーダーらの学生が目立つ存在だったのはいうまでもない。彼らは授業その他でイニシアティブをとり、一般学生と同様4~5年の在学期間中、「義務」としてセミナーなどを組織し活動した。また、夏休みに労働参加体験をする「FDJ学生作業班」は学内外に有名であった。FDJの全国中央組織は、SEDの地区指導部とともに入学学生の決定に影響力を発揮し、専攻分野全般にそのメンバーを配するために入学内定後すら変更を加えるほどの一大勢力を形成していた。しかし、FDJの活動家学生の存在は人目をひいても、彼らのその学習全般は標準化され、自分のイニシアティブなき他の学生もふくめて、その学力水準は70年代末以降低下が著しくなっている(ebd.)。

大学の一般的衰微は、すでに60年代末から始まっていた。1972年の学生数16.1万を頂点に現在が13万であるのも、計画経済が大学に強いた結果であり、党の支配はイデオロギーにかぎらず研究と

教育に圧迫をもちこんでいる。体系的ともいふべき教員の無力化は、教員から学位審査権以外のほとんどの共同決定権をとりあげ、他の権限を学長に集中させ、さらにその学長の選任も学術審議会の手でおこない、任免の権限を大学相に移すことで進行した。しかもかかる法制上の形式にとどまらず、むしろ実質的には大学はSEDの地区大学指導委員会の手の中にあつた。大規模大学ではおそらく20~25人のスタージの局員が学生集団、宗教行事、奨学金だけでなく、教授の採用すらコントロールしていた、と『シュピーゲル』はいつている。たとえば、旧ベルリン大学であるフンボルト大学では、陰で学生が「野蛮な政治的上級警察官」とささやいていたSEDの地区事務局長がその学長として「カール・マルクス政党大学」の者をおくりこみ、89年10月末にしてなお学生のデモ参加を制する演説をさせていた(Sp. 19. Feb. 1990 ; Sp. 30. Jan. 1990)。

## 2. 転換後の大学

10月初旬からうちよせ、日ごとに高くなっていった市民の波にくらべれば、教師と学生をふくめた大学人の動きはごく一部を除いて大きくはなかつた。組織体としての大学はむしろその防波堤ともいふべき既成勢力であつたにすぎない。転換は大学の外から来たのであり、彼らの内部から生れたのではない。それだけに転換後といえども学生や教師をおおう情況は決して明るくはならなかつた。11月10日、フンボルト大学で、新しい自主学生評議会の設立をめぐる投票が行われたとき、その投票率は75%、うち63%が賛成したものの、なお37%もがFDJ組織の学生評議会の継続を支持していた。翌11日、その自主学生連合のはじめての全国集会がもたれた。参加はもり上がりず、大部分は西ベルリンからの俗にいう「外人部隊」であつた(Aufb. 316)。

そしてこの大学の学生評議会の掲示板にはこんなはり紙がみられた。「このごろ、この国では多くの人がわれわれの従臣化(Mankuritisierung)を捨てさせようとしている。しかし、彼らにこのラクダの首など切りおとせないだろう。」ライプチヒのある学生クラブでは転向教師へつめよる事態もあつたが、ひとりの女子学生がいうように、「アカデミズムのアナーキーがおおっている」のが現状だつた(Sp. 19. Feb. 1990)。ある工科大学では「不安の雰囲気が支配し」、卒業予定者の採用取消しなどもおこっている。教授や学生はそのポスト、研究費、奨学金、住居などの特権的既得権のことで内心の不安と動揺をかくせずにいる。全国学生評議会の広報担当者は、200マルクの奨学金のことをさしてこんな巧みな表現をしている、「死ぬには多すぎ、生きるには少なすぎる」と。学生のなかには、学校での十数年にわたる「その教育でしっかりとしめられたML(マルクス・レーニン主義)というイデオロギーのコルセットを自分でひきちぎろうとするものなどいない。」たとえそうしても体型はしばらく残るであろう(Sp. 28. Mai. 1990)。

ある学長がいうように、「若い人はまだよい。」教授たちの方は、適格審査と、その結果によっては残留できるかどうかで深刻である。ライプチヒ大学の法律・経済系の部門で半分の教師にきりかえはありえても、残る半分は問題になるだろうといわれている。従来から大学という平静にして安泰な秩序のなかにあつただけに大学内エリートはこの転換をどう生きのびるか腐心するであろう。

それだけに「学生と進歩的講師たちのあいだでは諦めとフラストレーションが高まっている」(Sp. 19. Feb. 1990)。

学生は、すでに90年4月から西側大学への入学申請に動いているが、アカデミシェ・フライハイト(教授の自由)をよろこべずにいる教師は、それを彼らが自ら求めたものでなかっただけに多い。ライプチヒ市では党幹部の自殺などが報じられているなか、大学教師はそれほどでないにしても、哲学、歴史、法律、経済等の社会科学系を中心に、教育学もふくめて、イデオロギー教育体制の先端にあった部門では、学生もふくめていま深い谷間にある。かつてシラー、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルなどがその講壇にたったイエナ大学の哲学部門のように、いまは40人の講師や助手が30人の学生を相手にするというもおきています。こうした事態は、まさに宗教改革期以来実に450年ぶりである。講義では150年前同然のノートとり、奨学金は名目で西の4分の1、コピーは設備のある場合で20枚以内という大学に学生をとどめるのはむずかしい(Sp. 28. Mai 1990)。ただ、西独の受入れも難化し、1990年の夏学期で入学できたのは1学年全学生定員2万人のなかのわずか600人である。西側で「赤い修道院」といわれてきた「ジャーナリズム」部門をはじめとする社会、歴史、哲学部門のほか、特別行政学院や国際関係研究所などのエリート供給源も大きい転換を迫られている。また、理科系とて問題も多く、その設備、水準、待遇など西との差が歴然とするとき、たとえば保健省の発表では90年2月段階で医師、歯科医3,500人、看護婦数千人が流出し、ライプチヒの大学病院のごとく流出防止に緊急の予算措置すらとらざるをえなくなっている(Tsp. 23. Feb. 1990)。90年冬段階では西独から教師を招く財源もなく、なにより東独の教師がそれにふみきる勇気を欠いていた。こうしたおりK. BiedenkopfのようにCDU議員がライプチヒに経済学の客員教授として入る事実もあったが、これは市場経済への移行の大学版政策的布石であり、結果的にはザクセン州首相への第一段階であった(Sp. 15. Jan. 1990)。

### 3. 研究所・科学アカデミー

DDRの科学アカデミーは、その傘下に核研究からマルクス・レーニン主義研究まで50余の研究所をもち、関係者総数は23,600名にのぼる。東ベルリンだけで1,200名の社会・人文系研究者がいるが、大部分はいわゆる「Diamat(弁証法的唯物論)の恋人たち」である。これらの研究機関では研究テーマは統制され、官僚制と秘密主義、それからする不能率、加えて研究費不足と薄給という研究の機能と成果にとってかんばしからぬ条件であふれていた。西独との間の手紙類はすべて所長の検閲を要する機関もあった。筆者の個人的経験だが、1975年ライプチヒ大学図書館に1920年代のペスタロッチ文献数点の複写の照会をしたさい、他もふくめ原本を日本関係の英書と交換するという条件を提示され、それに従ったことがある。これはなにより精神科学関係の廃棄に近い位置づけを意味した。また、1982年、教育学アカデミー文書館がもつペスタロッチの手稿7枚のコピーを入手するのに、手紙、2回の訪問とそのさいの複数の係員による聴取と記録、そのあと西独から3回の電話をして2ヶ月後に西側の10倍近い料金で提供された。これでも、当時滞在中のマールブル



ク大学のDDR教育研究部門の人がいったように、西独側の個人や研究機関なら決して可能でないことが筆者には実現したのである。

研究者には長年注目すべき出版は少なく、自然科学の場合もここ数年来、いわゆる国際的な引用インデックスでジリ貧をかこっている。ハッレの物理学研究所長(H. Beathge)は、転換後はその研究員の60~70%がその能力不足のゆえに退任を余儀なくされるだろうと予測している。今やアカデミーでは「社会主義」の語がタブーになり、かわって「ヒューマニズム」が登場、「支持政党なし」が多数派に転じた。以前には研究所長の100%がSEDの党員だったが、転換後の選挙では50%におちている。90年6月、研究者はその生きのこりをかけてアカデミーの会議の場に800人のデモをおこなった。その中心は社会科学部門の研究者であった。研究所の名称変更や、「近代社会主義理論」といった研究課題がプロジェクト「学際的文明研究」へと変更されたりしている。従来の研究には、たとえばアカデミーの中枢部、SEDの中央委員会や政治局からのいわば確定された解答があった。しかし、学術審議会のML科学研究部門長で哲学・科学史中央委員会委員長(G. Kröber)は、115名のメンバーとともにその組織の合理化を強いられ、退任にさいして「科学は測定しがたい」と、いわねばならなかった(Sp. 23. Juli 1990)。

学生時代にDDRを出て現在はミュンヘン大学の物理学教授であるH. Fritzschが西独側与野党の首脳に宛てた公開書簡では徹底的に東側の大学・研究体制が攻撃されている。「社会主義的教授」が後継者決定の最大の条件となり、それが若手研究者の成長を阻んでいた。あるところでは85%にもものぼるSED教授がステージと関係をもち、それが大学の低迷を招いた元凶であった。このような「魔女狩り」的意識の変革には今後何世代かの年月を要するだろう。そのため、教育や研究における東西の統合は3年先おくりにせよ、という意見を表明している。マックス・プランク研究協会会長(H. Zacker)もいうように「今は荒地である」ことにはかわりはない(Sp. 23. Juli. 1990)。

上の実情は教育学アカデミーとて例外でありえなかった。教育学がマルクス・レーニン主義のもとで「社会科学化」するほど、イデオロギーに拘泥し政策に拘束された。加えて、おとなの前での子ども、権力や財力に無縁な学校教師、大学のなかでの教育専攻学生といったいわゆる弱い部分にかぶさる形で、他に比して単純かつ粗雑なドグマを作りあげ広げてきたことも否みがたい。89年11月20日に編集部が閉め切った教育学アカデミー発行の『教育学』12月号には、わずか5行分の次のような「お知らせ」がのっている。「ドイツ民主共和国教育学アカデミーの指導部、すなわち会長、副会長および事務局長は辞職した。学校政策および教育学の転換と、もはや現実性を失ったことへの共同責任を自ら認め、アカデミーの新たな形成とその研究活動を困難にしないためである」(Päd. DDR. 1989/12, 935)。この教育学アカデミーについて、自身その会員でギュストロウ教育大学の教授W. Naumannは、ハンブルク大学のK.-J. テイルマンの質問にこう答えている。「教育研究の位置と学校政策とは本質的に政治の優位により規定されてきた。ここ20年来の学位論文で党大会の方向づけにふれていないものはほとんどないほどだ。」現行の教育政策に反するものはしりぞけ

られ、たとえばライプチヒ大学の青年研究部門が進めたごとき重要な研究成果もすべて発表するに至らず、文部省の指導部からも批判された。「教育研究者もこの〔SEDの指導と要求の〕システムのもとで学校の抑圧に影響した、と多くの教師がいうのはそのとおりか」、と問われてこういう。「われわれは教育研究者として無批判であった。教育活動に対する党の要求に無批判な態度をとることに手をかした点では自分にも負い目はあろう。」しかし、「抑圧」ということでは、たとえば留年措置などは教師がしたことだ、と答えている(Päd. BRD. 1990/3, 30)。

教育学者や教師がもっとも愛用したことばのひとつに「教育の先駆性」(“Bildungsvorlauf”)がある。しかし、それはもはや「化石」であり、「大きいイリュージョン」と化している。ただ、「きょうはDDRの子どものイデオロギー洗脳の先頭にたち、きょうは、そのシステムの『スターリニズムの構造』を認め、『党と国家のおそろべき同一化』を嘆いている」とすれば、他人には水をすすめて節制を説き、自分はワインを飲んで不摂生をするたぐいであろう(Sp. 19. Feb. 1990)。ちなみに教育学アカデミーの前副会長K.-H. Güntherが主導した『教育史』(第14版, 1987)では、西独の政治教育を「帝国主義、反共主義、報復主義、軍国主義の弁明」とみなし、現存の教育理論家では、W. Brezinka, K. Mollenhauer, W. Klafkiの3人を名ざして「非政治性」「脱イデオロギー傾斜」「復古性」「モザイク」であるといった攻撃をしている。<sup>3)</sup>かかる図式的公式主義も上に述べた方向には当然の必然性であった。

なお、一方ではSED体制で追放され不遇を強いられた研究者の調査とその復帰措置についてはかなり早くから進んでいた。ことに最近10年間は多くの研究者や学生が、退職、配転、降格、出版禁止、身分取消などをうけてきた。大学史におけるこの「暗黒の一章」を洗い出し記録するためにも89年12月に大学省はそのような研究者の職場復帰の決定をした。それにそってフンボルト大学でも9人の新任教授と1人の学生で構成する「10人委員会」を発足させたが、その委員長は、90年3月段階で25件の審査請求のほか、50件の事例があるといっている。また、国際関係研究所ではその評議会がポツダムの外交官養成機関の元講師に対する18年前の処分を遺憾とし謝罪するといったケースも出ている。一般に、追放された事由は、当局批判、正統化された体制イデオロギーへの抵抗や反対、西側での出版や原稿送付などにおよび、年齢層は現在50歳代後半の人に集中、なかにはR. Havemannのようにすでに死亡している場合もある。H. Meyerの場合は、ここ20年間「社会学」の概念の使用を禁じられていたが、90年2月、新生の「ドイツ社会学会」(DDR)会長に選任され、R. バーロはすでに東に戻り活躍している(Sp. 19. März 1990)。

#### IV. 市民・生徒・政治集団からの教育要求

以上に紹介した教育に対してはすでに壁の崩壊以前の10月初旬から市民グループ、教会グループ、芸術家グループ、生徒とその親、少数政党組織などから不満、非難、批判、要求、対案などが出さ

れていた。人びとは教会に集まり街頭に出てきた。人口60万のライプチヒの「月曜デモ」では週ごとに7万、12万、30万のひとが、同じく110万の東ベルリンでは11月4日にはついに100万人が外に出た。12歳の少年がなぐられ、連行されて顔写真や調書をとられ明け方まで拘束されたりしたが(Wir. 114~116)、デモのプラカードには「マルゴット〔ホーネッカー人民教育相〕、かかあ天下をひきおろせ!」「ボイコットせよ、ロシア語、公民科、労働共同体を!」などと書かれたものもみられた(Sp. 12. Feb. 1990)。5学年からの必須科目ロシア語は1週6時間、6学年からは5時間、そのあと10学年まで3時間もあった。公民科は「スタージ」と似たひびきをもたせて生徒たちに「スタービュ」(Stabü)と呼ばれて毛ざらいされ、いわゆる<sup>ポリテクニズム</sup>総合技術教育は7、8学年で週4時間、9、10学年では5時間もあり、「子ども仕事」とあなどられていた。「過去40年間にわたって青少年が一種のウソの殉教者になっていた」のであり、「ドリルと猫かぶりの教育」をうけてきた。あるオペラ演出家(H. Kupfer)は、学習と職業を結びつけるこの中等教育にふれてこういつている。「このシステムは私には陰険にして完璧な選抜-抑圧システムとして世界最大のものだったと思う。…多くの人是不安や確信でこの革のムチにキスをしてきたのである」(ebd.; Päd. BRD. 1990/3, 28f)。また、ある女教師は次のようにとらえている。いわゆる<sup>コマンドベグ</sup>「命令の教育」が「構造暴力のシステム」となり、党の支配下の地区学校評議会から校長へ、校長から教師へ、教師から児童・生徒の前に登場した。そこいた青少年は「厳格にして画一的な評価方式」のもとで、ただ「将来と外部」にむけて策定されたオフィシャルな像を信じてそこにとどまるか、この現実への幻滅に至るか、このふたつの間で葛藤していた(Päd. BRD. 1990/3, 5, 28f)。

一方、体制危機を感じ、「新思考」をさらに新思考へと転じてSED体制を擁護する理論戦略家も市民の前に登場した。SEDの若きエリートは、大学やアカデミーの教師や研究者が参加の前で峻巡していたのに比し、「システム」「ディスクルス」「メディア」「リフォーム」といった従来の体制用語にはあまりみられなかったタームをちりばめた論争文書を出してきた。彼らは、党の権力構造に期待し、批判の対象を専らニューフォーラムにむけ敵対する(Wir. 146~156)。また、フンボルト大学の史的唯物論の部門長(M. Brie)が、西側記者に次のように語っているのも同じ関連である。「いまここから党の更新がはじまる。この新しい歴史的チャンスにドイツ民主共和国の民衆は街頭でのプロテストでわれわれに挑戦してきた。われわれもそれに応える。今日ここに新しい社会主義の党をめざして戦いが開始されている」(Sp. 13. Nov. 1989)。これらに比べれば、芸術アカデミーなどの方が、「歴史の要求と日常の経験」を重視し、「道徳的精神的風土の破綻」に危険をみて、市民や若者の近くにたっていた。市民の前には指揮者K. Masur、画家B. Bohley、作家クリスタ・ヴォルフが出てきた。10月下旬には「ひらかれた門とひらかれたことば」の市民集会を前にしてSED幹部(G. Schabowski)のなかからも「デモはこの都市〔ベルリン〕の政治文化に属する」という声がかかれた。FDJの第一書記長も「対話と更新のためにはいかなるテーマ、個人、制度、政治的信条や世界観にもうタブーはない」といわざるをえなかった(Aufb. 311)。

こうした時期にいくつかのグループや政党の側では教育をめぐる主張や方針を示すが、政治的、経済的要求の陰にかくれがちになり具体性を欠いていたのも事実である。しかしそうしたなかで11月25～26日、東ベルリンでの左翼連合の会議で13の自主グループが示した次の提言 (Beitrag der 13. Autonomen Gruppe zum Kongreß der Vereinigten Linken) は、現実の問題のありかを的確にとらえ、あわせて西独の現実や常識に属するものをみせている。教員養成計画の再考、教育学アカデミーの点検とその役割転換、オルタネイティブな学校実験の導入、親の教育権の確立、普通学校と特別学校との統合、教師によるカリキュラムの自主編成、公民科、防衛科、軍事的予備教育の撤廃、大学における文科系学生定員の増補と物理、化学、生物、地理関係の学生定員の削減、音楽、美術、スポーツの領域での内容検閲制の廃止、教員、児童、生徒の国際交流制度の導入、外国語教育の抜本的改革、教員採用後3年目の1年半の研修機会の導入、ピオニールやFDJ活動からの教師の解放、校長と学校評議員の選挙制の導入(Wir. 236f)。また、グリューネ(緑の党)設立のよびかけは、あらゆる教育の場面でのエコロジカルな枠組みをうたい、その基礎に「環境—平和科」の導入を説いた。さらにニューフォーラムと同じ「90年代連合」(Bündnis 90)に加わった「民主主義をいま」(Demokratie Jetzt)のグループは、学校、大学、研究機関が一政党のイデオロギーに支配され、そのインドクトリネーションが侵入するのを排除すること、教育の内容と方法の決定に親がその共同決定権を行使して参加することを主張した(Wir. 187, 36)。

さらに、「ドイツ連合」の一面を形成し、1990年3月の選挙で保守党デメジュール内閣に参加する政党「民主主義のはじまり」(Demokratischer Aufbruch)が89年の10月29日に出していた「青年のビラ」(Flugblatt der Jugend)には「FDJでのしごきはごめんだ」という形で次のような要求をかかげている。組織加入への強制の撤廃、ファシズム的暴力的集団を除いた多様な青年組織の育成、青少年活動に対する公金の新しい分配方式の確立、一面的なイデオロギー支配からの離脱、政治見解の非検閲、防衛科と軍事的予備訓練の廃止、徴兵にかわる市民的奉仕活動や徴兵拒否権の確立、自己責任体制のもとでの青年グループの運営(Wir. 175)。

11月に入って、それより1年半前に軍のパレードの旗ふり動員を批判した生徒を校長が上部機構の指示で放校処分にしてたケースが撤回された。11月7日、文部当局は防衛科の廃止と学校五日制の導入を発表、16日には教師にむけて、教授案をめぐる提案を示すが、これらは党が決定した転換を若干手なおししているにすぎなかった。『新しいドイツ』の11月11/12日号に出されたSEDの行動綱領は、防衛科の「廃止」をいう以外、他はすべて「改変」(Umsetzung)の表現をとり、FDJについては「青年の政治活動でのその特別な責任をみとめ支援する」としてむしろ強弁に近い姿勢を示している。しかし、その1週間後には同誌でモドロウ首相は、「若者がイエス・マンと二枚舌の適応行動へ教育されてきた」事実を認め、「われわれはここ数十年の社会主義的人民教育のあらゆる積極的なものを新たな発展へと止揚したい」としながら、「社会主義の更新が就学前教育から大学教育にわたって改革(Reform)を求めている」と言明した(ND. 18/19. Nov. 1989)。

生徒たちは口々にこういう。「もうSEDとその周辺のひとつは追放されていない。でも憎しみはつるばかりです。」「公民科の教師は病気同然です」(17歳)。ある生徒がいうには、その学校の講堂にかかっていたホーネッカーの肖像ははずされ、かわってかつてナチに追われたジャーナリストのものがかけられている。別の学校の壁にはFDJの代名詞「テールマンを忘れてはいけない」と読める文字がいまは消されている(Päd. BRD. 1990/3, 30)。

一方、教師の方からは困惑、自信喪失、反省、いなおり、転向といった幅でゆれている声がきこえる。「もう授業ができない。どうしていいかわからない。」「自分が壊れてしまった。自分のしてきたこと、親や生徒にしてきたことが、一体なんだったのか。」ある教師は、「授業はいわば法律だったとっていい。それは学校に管理され、さらに上の方で調べられていた」と語り、別の教師は、「自分で授業をくみたてることなどまったく習ってきていない」という。同様にある女教師は、「西の教育のことなどまったく知らない」と告白する(Sp. 12. Feb. 1990; Päd. BRD. 1990/3, 30)。とくに高齢の教師のショックは大きく、危機感やデプレッションが広まった。加えて「教員組合も一種の心理的アナキズムに陥っている。」もちろん、官製の『ドイツ教員新聞』も罪責感の告白をのせた(DLZ. 1989/42)

『シュピーゲル』誌の記者(M. Matusse)も年末の東ベルリンの状況取材し興味ぶかい現場の事例を書いている。ある女性行政官は、マルゴット・ホーネッカーがゴルバチョフのいう「多元的、人間的、近代的な社会主義」を「デマゴグのバカ話」としていた頃からアクティブなSED党员として30校余りの学校を統括してきた。そしていま、その同じポストで新しい意気込みを披瀝してみせた。「現在も党员ですか」と記者が問うと、「いいえ、3週間前に離党しました」といって顔を赤らめた(Sp. 8. Jan. 1990)。一方、このような行政担当者とちがって生徒を前にする教師は、旧体制に「熱心かつ有能」であった者ほど直面した困難は大きくなっている。水準の高さでかなり有名な学校の上級担当の男性教師は、その授業で生徒の揶揄、黙殺、責任追及、同情にあっていた。彼を生徒が批判した文章や中央政治局幹部の退任を報じた新聞の切りぬきがはりつけられている教室で歴史授業は進めにくいし、マルクス・レーニン主義の絶対的正当性を説明しえないでいた(ebd.)。この優秀校の生徒たちはもう教職界の出世主義者を乗りこえてしまっている。彼らはロックのバンドを作り、コンピューターにこり、精神分析の本を読んでいる。著名な作家Ch. Heinの子どもで2年前にスタージに追及されたこともあるヤコブもそのような生徒のひとりである。ニッケルのメガネをかけ、セーター、ジーンズ、首まきの姿で耳にはイヤホーンをし、手には夕方のデモで配るピラをもってこんなことをいう。「政治的立場やイデオロギーを気にするのは、エリート卵か、支配欲をもった小さなスターリニストだけだ」(ebd.)。

国外移動の自由は、ただちに900万人に国境線をふみこえさせたが、それ以前でも東ベルリンの生徒数500人のある初等・中等学校から23人の子どもが西へ消えていた。国境へ50キロのマグデブルクの一地区だけで2ヵ月間で親にすてられた108人が施設に入ってきた(Päd. BRD. 1990/3, 8; Sp.12. März 1990; St. 21. Dez. 1989)。東ベルリンのある教師の報告では、10月初旬の建国40年祭

の直後から変化がみえはじめていた。「DDRはDer Doofe Rest (まぬけの残骸)だ」「人民教育はかき乱された汚い巢, 恥さらしだ」といった落書きが学校にみられた。校長は掲示を出し、防衛科の停止, 党の研修参加を希望せぬ教師にもポリテクニズムの授業担当を許容する決定, 公民科は歴史の授業でおこないそこでの生徒の意見表明は採点の対象にしない, といった提案をしてきた (Päd. BRD. 1990/3, 8f)。

また, これとは別の東ベルリンの学校のことをフンボルト大学の教育学の老講師が次のように報告している。12月初旬の土曜日, 校則のみなおしを要求する生徒70~80人の校内デモが発生した。学校当局はその3日後に上級生8~9学年の生徒代表との面会に応じた。教頭が「なぜ君たちはFDJの指導にしたがわないのか」という。これに対して生徒は、「なぜぼくらの権利を学校は認めないのです。……FDJなどばかばかしいおつとめにすぎません」と返した。ある女生徒はこんな発言をした。「私がデモに参加し, 授業に出なかったとき, K先生がいました。『きみは進学希望だろう, もうあれでだめになってしまったよ』」 (Päd. BRD. 1990/3, 13)。

「すべての者に平等の教育機会を！」この理念を目標にして当初は社会階層別入学が大胆に実施され, 1950年代には労働者—農民階層出身の大学生が全体の50%以上を占めていた。しかし, 60年代のはじめ以降18%に低下している。しかも, アビツアを取得しうる義務教育終了後2年間の拡大初等・中等学校(EOS)と3年制職業学校には同年齢層の4分の1が進学するが, 大学はその8%分の定員をもつにすぎない。そこに成績評価基準のあいまいさに, 政治的圧力がからまり暗い部分が露呈する。「社会主義的人格」を評価と選考の中心にすえたこの資格制度では, 大学の総定員枠と専攻分野別定員の絶対的な不足が加わって生徒の進学のと不可が分れた。加えて最大の問題は決定の最終権限が学校当局になく, 地区の学校評議会がそれをもつところにあった。このことは生徒の進路決定のみでなく教師の勤務評定と能力評価にかかわり, 生徒と教師は学校評議会の完全な支配下におかれることになる。教師の側は極端に点数を甘くし, 場合によっては5段階最上位の「1がふつう」という現象や学校ぐるみの点数改ざんまで行われた。ある地区では, 8学年で毎年8~15%の生徒を放校するよう党が圧力をかけ, その場合単に学習成績がその事由になるよりも, スタージの側からの要注意人物の子どもが標的にされた。また, 有力党員の子どもの60~80%は成績と無関係に拡大初等・中等学校への進学やアビツアを入手していたといわれる (Sp. 12. Feb. 1990; TZ. 1. Juni 1990)。

かかる恣意, 不公正, 腐敗の一般性が, 西側マスコミが当事者の証言を用いて仕上げた作為や虚偽でないことは, いくつもの公的な表明や内部告発で裏づけられる。たとえば, SEDの機関誌『新しいドイツ』89年11月第2週号さえはやくもこう述べてる。「試験と評価が真の成績を反映するよう改善され, また教員の独立と責任を狭めている行政側の処理と慣行とを排除すべきである」 (ND. 11/12. Nov. 1989)。フンボルト大学の教員の言をかれれば, それはまさに「ひとつの犯罪であった」 (Sp. 6. Mai 1990)。

東独のアビツアの「高すぎる点数インフレーション」については、西側でもつとにいわれていた。それが壁の崩壊がもたらす東側学生の流入、統一後の一層の増加、加えて西側の有資格者の入学制限 (numerus clausus) の現状などが重なって、世論や連邦および各州の文部当局、政党などの反応が高まり、関係当局の調査やマスコミの取材で問題の事実は一層明らかになった。西ベルリン、バイエルン、ラインラント・プファルツの文部当局も問題にし、事実、東独の文部次官やフンボルト大学の学長もこの点数インフレを認めている (Sp. 13. Feb, 27. April, 26. März 1990 ; DLZ. 1990/18)。

西独では1970年以降、東独のアビツアの点数はほぼそのまま認めてきた。そのため、流入学生はきわめて有利な形で学籍や専攻分野に入る許可を入手していた。しかし、社会的な関心の高まりのなかでドルトムントの学籍配分センター (Z V S) はすでに在籍中の東独有資格者の点数を発表するに至った。それによると665名の平均点は1.58、そのうち50%が1.0~1.4以上の上位者群に属し、西ベルリンの2.70、ヘッセンの2.40、バイエルンの2.70に比べてきわめて高いものであった。東独側の年間有資格者は3万人であり、その大学の総定員は2万人、またその後の西側での問題指摘もあって東独文部省が大学改組をとおして確保しようと発表した数字では2.6万人である。もし前者のように3万人のうち1万人が今秋1990年10月の新学年度に西の学籍を求めるとすれば、その上位者群の80%が西側が入学制限を設けている部門に入学でき、医学系でも2人に1人が東独学生に占められることになる (Sp. 26. März 1990)。

東からのある女子医学生はこういう。「むこうではやさしかった。すべてまる暗記だったから」 (Sp. 26. Mai 1990)。西側ではつとに東側学生の学力水準を問題にする声もあった。制度的にみても、東側はアビツアのコースは11、12学年の2年間にすぎず、それ以前のカリキュラムでも職業技術とその実習が強調され、逆に外国語能力はロシア語を除き決定的な欠陥をもつといわれてきた。西側では州によって差はあるとはいえ、アビツアコースへの分化は5~7学年ではじまり、修学総年数も1年長く、加えて留年こそギムナジウム生徒のあかしとすることき伝統があり、点数はきびしい。資格制度が東独ではそれに必要な条件を十分もたず、いわば悪しき推薦制に堕し、それを国家的規模で西独で利用することになりかねないのが、この「高すぎる点数」問題であった。フンボルト大学の元英語学教授であるデメジュール内閣の文相は西側記者とのインタビューでこういっている。「それはグロテスクというほかない。…学校の成績構造はいま、決定的に重要な場面にある」 (Sp. 15. Mai 1990)。

ただ、上のアビツア点数が、単に「学校の成績構造」の不公平の問題だけなら、統一を大義名分にして「朗々たる未来交響曲」の棒をふる西側連邦文相 J. Möllmann や C D U / C S U の文教議員の考えのように、実務行政やいわば各州まかせにして一定程度の成果はえられるであろう (Sp. 27. April, 1990 ; Sp. 11. Mai 1990)。しかし、東独教育の問題点として問われるべきはその先にもある。つまり、点数が青少年の進路進学を決定するだけでなく、点数評価という権力を手にする教師が生徒とその親を支配し、教師の教育方法で高まる訓練への傾斜やその教育内容の貧困さが免責さ

れるところにあった。ラインラント・プファルツの州立教員研修センター長 W. Böhm もいうように、「訓練が授業の前提となっているために、成績の芳しくない場合、学校が教える内容と生徒の学ぶべき関心とはまったく同じだと生徒に信じこませる」(Tsp. 11. Feb. 1990) という問題がついてまわる。ある12歳の子どもは、「学校ではもうほとんどがドリルだった」といい、年長の生徒には学校教師への服従的態度もたらず一方でその背後や将来において反動形成がひきおこされる。かかる問題点の所在は、先に紹介した当局と住民との地区集会や東ベルリンのE O Sの生徒たちがはっきりと捉えていた(DLZ.1990/25 ; Sp. 12. Feb. 1990)。

本稿および別稿に使用した資料の収集や提供について Prof. Dieter Hoof, Braunschweig, Deutscher Bundestag (西独連邦議会), Bundesminister für Bildung und Wissenschaft (西独連邦文部省), Frau Dorothea Laskowski, Berlin の協力をえたことを感謝したい。なお、東独の Prof. Klaus Drebes, Magdeburg からの貴重な資料が筆者のもとに到着したのは、脱稿後の10月初旬であった。稿を改め使用したい。

#### 使用資料略号一覧

- |  |   |
|--|---|
| BMBW : Der Bundesminister für Bildung und Wissenschaft, Presse Info. 22. 6. 1990 | Hbdd : Langenbucher, W. (hg.), Handbuch zur deutsch-deutschen Wirklichkeit — BR D/DDR im Kulturvergleich —, 1988.   |
| BmFIB : Bundesminister für Innerdeutsche Beziehungen                             | JW : Junge Welt   |
| Billu. : Berliner Illustrierte, Dez. 1989, Sonderdruck                           | Aufb. : Knabe, H. (hg.), Aufbruch in eine andere DDR — Reformer und Oppositionelle zur Zukunft ihres Landes —, 1989 |
| BMP : Berliner Morgenpost  | ND : Neues Deutschland  |
| BZ : Berliner Zeitung  | NRZ : Neue Ruhr Zeitung   |
| BE : Bildung und Erziehung   | Päd. DDR : Pädagogik, Akademie der pädagogischen Wissenschaften der DDR   |
| BBT : Bulletin Bundestag   | Päd. BRD : Pädagogik heute  |
| BPA : Kommentarübersicht, Deut. Bundestag  | Räu. : Ebert, N. (hg.), Räumt die Steine hinweg, 1990.  |
| CDU/CSU : CDU/CSU Fraktion — Presse-dienst —                                     | RM : Rheinischer Merkur   |
| DBD : Deutscher Bildungsdienst   | RP : Rheinische Post  |
| DLZ : Deutsche Lehrerzeitung, DDR  | St : Stern  |
| DT : Deutsche Tagespost  | SPD : Sozialdemokratischer Pressedienst   |
| DUD : Deutschland — Union — Dienst —   | Sp : Der Spiegel  |
| FAZ : Frankfurter Allgemeine Zeitung   | SpD : Der Spiegel — Dokument — 2  |
| FRS : Frankfurter Rundschau  | SpS : Der Spiegel — Spezial — 2   |
| GA : General Anzeiger  | St.Z : Stuttgarter Zeitung  |
| GEO : Geo — Special, — DDR —   |   |
| HB : Handelsblatt  |   |



SüZ : Süddeutsche Zeitung

Tsp : Der Tagesspiegel

TZ : die Tageszeitung

Tr : Tribüne

UdD : Union der Deutschland

VP : Vergleichende Pädagogik, DDR

W : Die Welt

WaS : Welt am Sonntag

Wir : Schuddenkopf, C. (hg.), <Wir sind das Volk!> – Flugschriften, Aufrufe und Texte einer deutschen Revolution –, 1990

Ws : Weltspiegel

WN : Westfälische Nachrichten

Z : Die Zeit

## 注 釈

- 1) Pestalozzi, J. H.: Ja oder Nein, in: Pestalozzis Gesammelte Werke, 1937. Bd. 10, S. 77.
- 2) Einführung zur die sozialistischen Produktion, IX 1983, 23. Aufl. SS. 90~93, 106f, 124.
- 3) Günther, K.-H. (Leiter der HG.): Geschichte der Erziehung, 1987, SS. 733, 741f.